34. 肝細胞癌の肝外転移診断における全身ガリウムシンチの有用性

 小泉
 義子
 高田
 惠二
 福田
 晴行

 田中
 正博
 松村
 康正
 岡村
 光英

 谷口
 脩二
 福田
 照男
 越智
 宏暢

 小野山靖人
 池田
 穂積
 浜田
 国雄

(大阪市大・放)

 塩見
 進
 黒木
 哲夫
 (同・三内)

 林
 茂筆
 (伊丹市民病院・放)

われわれは, 過去 5年間 (昭和55年~60年) に全身 Ga スキャンを施行した際、36例の肝細胞癌症例に遠隔転移 を検出し、全身 Ga スキャンが有用であったので報告 した. 36例の年齢は43歳~73歳(平均59.6歳), 性別は 男性 29 例, 女性 7 例である. 転移部位は, 骨 20 例, リ ンパ節10例, 肺7例, 胸膜壁4例, 副腎3例であった. 骨転移例について、各転移巣の Ga スキャン像と骨スキ ャン像を比較すると, 異常集積像の一致しない例が7例 (9か所)みられた、骨スキャンでは、欠損像とその辺縁 をふちどるような集積像として描出され、ガリウムはこ の欠損部に一致して強く集積した. これらは腸骨, 胸骨 など扁平骨に多発していた. ガリウムの集積範囲が骨ス キャンでの集積像より広く, 骨外進展部をも描出した例 もみられた. 骨スキャンのみでは, 欠損像は読影しにく く, 骨外進展部の描出も不十分であり, 全身 Ga スキャ ンの併用が重要と思われる. 少数例ながら, 75Se-セレ ノメチオニンによる陽性描画併用例 (3例)と, Gaスキ ャンの比較では, Ga スキャンの方が, 転移巣を明瞭に 描出した。また、99mTc-PMTによる陽性描画併用例 (3例)では、Ga スキャンと同様かなり明瞭な転移巣が 描出されたが, 腰椎や骨盤への転移巣については, 腸管 へ排出されたアイソトープが障害となり、 読影が困難な 場合があった.

最近、シンチカメラの性能向上により、短時間で全身像を得られるようになっており、Gaスキャンの際、肝の陽性描画だけでなく遠隔転移を診断する上で、全身Gaスキャンは有用と思われた。

35. び漫性肝疾患における 67Ga の肝集積

中野 俊一 長谷川義尚 井深啓次郎 橋詰 輝己 野口 敦司

(大阪成人病セ・アイソトープ診)

67Ga は血中ではトランスフェリンと結合して運搬され、その肝、脾への分布は血清不飽和鉄結合能 (UIBC) と関係が深いという動物実験の成績が報告されている。われわれは今回び漫性肝疾患について 67Ga の肝へのとりこみと UIBC および肝機能検査成績との関係をしらべた。肝腫瘍の疑いで 67Ga citrate と 99mTc 錫コロイドを用いて減算シンチグラフィを行った症例のうち、その他の検査およびその後の経過から腫瘍性病変が否定された。び漫性肝疾患57例についてしらべた。このうち17例は腹腔鏡および生検により慢性肝炎或は肝硬変と診断されたが、その他は臨床検査成績によるものである。

データ処理装置に収録された肝の ⁶⁷Ga シンチグラム の正面像を再生し,肝石葉上方および腹部で肝,脾,腎,大腸,骨を除く部分に関心領域を設け,両者の1 画素あたりのカウント数の比 (肝/腹部比) を算出した.

び漫性肝疾患57例の UIBC の平均値,標準偏差および範囲は $172\pm95~\mu g/dl$, $20\sim414~\mu g/dl$, 6^7 Ga の肝/腹部比はそれぞれ 2.11 ± 0.68 , $1.22\sim5.14$ と広い範囲に分布したが,両者の間には有意の相関がみとめられた (r=0.76, p<0.01). 次に 6^7 Ga 注射の前後 2 週間以内に行われた肝機能検査のうち,GOT,GPT,アルブミン (%),ガンマグロブリン (%),ヘパプラスチンテスト,および ICGと 6^7 Ga の肝/腹部比の関係をしらべたが,いずれとの間にも有意の相関はみられなかった.すなわち,び漫性肝疾患においては肝機能障害の程度よりも UIBC の方が 6^7 Ga の肝へのとりこみに与える影響が大きいものと考えられる.